

エゴマ等の6次産業化で故郷の復興支援を

名称：石井農園 (石井 絹江)

所在地：双葉郡浪江町

【浪江町の避難区域解除状況】

平成29年3月31日 居住制限区域及び避難指示解除準備区域が解除

【プロフィール】

6次産業化に取り組むため、平成27年10月に加工場を整備。エゴマ、果樹等を栽培し、各種加工品の製造・販売を通して、浪江町の復興を支援。

【震災前の経営と避難状況】

震災前は、浪江町津島地区に3世代8人で住み、町役場に勤務。ご主人は乳用牛35頭を飼育する酪農家で、一家は原発事故により、二本松市内に避難を余儀なくされました。

【設立の経緯】

石井さんは、平成24年3月に町役場を定年退職した後、「かーちゃんのカ・プロジェクト協議会^{注1}」に参加し、仮設住宅へお弁当を配付するなど、1年半にわたり避難住民への支援活動に従事。その後、ご主人が体調を崩したことから、農作業で少しでも元気になってもらおうと、福島市内の農地を借りて農業を開始しました。

注1：避難を余儀なくされた浪江町、飯館村、葛尾村、田村市都路、川俣町山木屋、川内村の女性たちが発足。イベントでの郷土食の販売、避難住民への支援活動。

石井さんは、「ふるさとに恩返しするため、浪江町の復興に尽力しよう。」と決意。浪江町から避難してきた人や

避難先で出会った人たちの協力を得て、農産物の生産から加工・販売までを行う6次産業化を目指し、平成27年10月、福島市内に加工場を整備して「石井農園」を設立しました。



石井絹江さん（左） 右は協力者の笹谷搾油所 三浦功二さん

【取組の内容】

石井農園では、エゴマ、各種果樹、カボチャ等を栽培し、えごま油、ジャム、ドレッシング等を加工・販売しています。エゴマは、震災前から浪江町内で栽培されていた作物で、平成26年から福島市内で栽培を開始。さらに平成28年、浪江町内の農地を借りて実証栽培を開始し、放射性物質検査をクリアして、平成29年からエゴマの本格栽培に着手しました。浪江町津島地

区の自宅は帰還困難区域内にあるため、福島市から片道2時間かけて浪江町のエゴマほ場に通り、栽培管理。収穫後の搾油加工は、エゴマ栽培に協力している「笹谷搾油所」(福島市)に委託しています。

平成30年のエゴマ栽培面積は、福島市内(1ha)と浪江町内(2ha)合わせて3haと、前年(1.8ha)から大幅に増加し、単収(乾燥子実)70kg/10a、収穫量約2tを見込んでいます。

果樹は、福島市内の加工場の周囲で、サクランボ、カキ、イチジク、ブルーベリー、コクワ、ナツハゼ等の栽培を開始し、ジャム原料のほか、一部生食用としても販売。また、震災後、新たに福島市内の新規就農者や伊達市内の果樹農家とも交流を持ち、モモ、リンゴ、ウメ、プラム等の果実を購入し、ジャム原料として使用しています。



えごまセット商品「えごまづくし」
(右から、えごまドレッシング、えごま油、エゴマラー油(上)、えごまジャム(下))

加工場の整備に当たっては、保健所から6種類^{注2}の食品営業許可を取得し、えごまジャム、えごまドレッシング※、エゴマラー油※、トマトドレッシング、各種果実ジャム、かぼちゃ饅頭、惣菜等を製造(※は委託製造)。

注2: 飲食店営業、菓子製造、乳製品製造、そうざ

い製造、缶詰又は瓶詰食品製造、ソース類製造の6種類。

かぼちゃ饅頭は、浪江町の郷土菓子として昔から食べられており、震災後、新たに商品化したものです。原料となる九重栗カボチャは、福島市内及び浪江町内のほ場で栽培。8月に収穫した後、蒸かしてペースト状にし、一次原料として冷凍保存することで、ほぼ通年での饅頭製造が可能です。九重栗カボチャの特長であるホクホク感のある饅頭として、好評を博し、テレビなどマスコミで紹介されたため、県内外から注文が相次いでいます。



かぼちゃ饅頭

えごま油、ジャム等の各種加工品は、福島市内や浪江町内での委託販売のほか、県内及び首都圏でのイベントにおいて出張販売もしており、対面でお客さんの声を直接聞いて、商品改善に役立てています。また、石井さんは、様々な人との出会いを大切にしており、人と人との繋がりを基に、新たな作物栽培や商品開発・販売に取り組んでいます。

平成30年10月28日には、エゴマが無事収穫できたことに感謝し、浪江町内で「エゴマ収穫祭」が開催されました。エゴマ料理やかぼちゃ饅頭等が振る舞われ、町内を始め、県内外から

関係者が多数参加して交流を深めました。



エゴマ収穫祭の様子

【関係機関の支援】

浪江町役場からは、原子力被災12市町村農業者支援事業を活用したエゴマ関係機械の導入について、双葉農業普及所からは、農作物や加工品の放射性物質検査等について、それぞれ支援を受けています。また、ドレッシングやジャム等の新たな商品開発については、官民合同チームを通じて専門家からアドバイスを受けています。



汎用コンバインによるエゴマ収穫

【課題】

これまでのエゴマ栽培では、苗の定植、収穫、乾燥・調製といった作業全てを手作業で行っており、労働時間の短縮が課題でした。平成30年に作付面積が3haになったことを機に、原子力被災12市町村農業者支援事業を活用し、定植機、汎用コンバイン、乾燥・調製機を整備したことから、主要作業

の機械化が可能となり、大幅な省力化が実現しました。

【目標・将来構想】

平成30年から、えごま油の製造量が大幅に増加することに伴い、品質・味の良さをPRするとともに、ジャム、ドレッシング等の関連商品と併せて、一層の販売促進、販路の拡大に取り組む考えです。

また、新たな6次産業化の取組として、健康食品の原料として野ブドウに着目し、平成30年から試験栽培を開始しています。今後、商品開発の専門家の助言を受けながら、新たな加工品を開発していく計画です。

浪江町内では、国道6号線沿いに「道の駅」の建設が計画されており、石井さんは、「将来、道の駅で販売する農産物や加工品を町民とともに作っていききたい。そのためには、体がつづく限り浪江町に通い、復興を支援したい。」と想いを語ってくれました。

(平成30年10月)